様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　４ 日現在

機関番号：３４３１４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ０１０２８

研究課題名（和文）ローマ帝国支配地域の「ローマ化」と帝国統合に関する研究

研究課題名（英文）The Reconsideration of Romanization and the Research on the Integration by the Roman Empire

研究代表者
南川　高志（Minamikawa, Takashi）

佛教大学・歴史学部・教授

研究者番号：４０１７４０９９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、ローマ帝国が領域の統合を達成して古代世界を変えたのか否かを考察することを目的とした。研究の結果、「ローマ化」の進展を軸に語られてきた帝国統合に関する学説は、「ローマ化」概念のもつ問題だけでなく、社会変化の実態についても認めがたいことが判明した。史料の分析と遺跡・遺物の現地調査により、ローマ風への変化が語られてきたガリア諸属州でも速やかな都市化やローマ化を認定することは難しく、先住者の生活様式の残存や文化の混淆状況を重視すべきと結論された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の結果、ローマ帝国が征服した諸地域を都市化しローマ風の生活様式を伝えて「文明化」したとの伝統的な説明も、ローマ世界に「グローバル化」概念を適用しようとする新説も、ともに適切な学説とは認めがたいことが判明した。とくに今日のヨーロッパ西部地域の古代史については、ローマ支配の影響力を過大評価せず、また住民のアイデンティティの多様さと重層性、さらに可変性に留意する必要がある。そうした観点からの歴史研究は、現代ヨーロッパ社会の歴史的性格や現状のより深い理解にも貢献できると思われる

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to examine the integration in the Roman Empire in the age of the Principate. For a long time, the scholars have emphasized the development of urbanization and Romanization of the early Roman Empire in the West and have assumed that the Gallic Provinces were integrated into the Imperial System. But, on the basis of our research, we conclude that the urbanization and Romanization in the Gallic Provinces made slow progress. Also, we should attach the great importance to the lifestyle of the indigenous people and hybridity of cultures in the provinces of the Roman West.

研究分野：古代ローマ史

キーワード：ローマ帝国　ローマ化　帝国統合　グローバル化　アイデンティティ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

ローマ帝国の世界史的意義として、広大な地域を長期間にわたって安定的に統治し、領域内の諸地域を社会的文化的に発展させたことが挙げられる。とくに今日のヨーロッパに都市的生活と文化をもたらしたことが強調されてきたが、この説明のために最も重視され活用されたのは「ローマ化」概念であった。帝国が支配地域をローマ化して、ローマ風、イタリア風の都市的生活様式と文化をもたらし、それによって未開の征服地を文明化したとされてきたのである。これと関連して、ローマ帝国は中央集権的な統治を実施し、ローマ人の言語、法律、貨幣と度量衡、文化、そして宗教を領内広く行き渡らせ、国家統合を実現した、とも語られた。

この「ローマ化」の概念を初めて用いたのは、19 世紀ドイツの大学者テオドール・モムゼンであった。帝国領の東半にはヘレニズム時代以来都市が栄えていたが、ローマ帝国は領土西半の征服地にも都市を建てたり整備したりしたので、数多くの都市が繁栄し、帝国領内は次第に均質化していった、とモムゼンは考え、その意味で「ローマ化」概念を用いた。しかし、20 世紀初頭のイギリスの学者 F・ハヴァフィールドは、この「ローマ化」概念を「文明化」と同一化し、帝国は属州としたブリテン島を速やかに「文明化」したと論じたのである。その後、歴史学の分野でもローマ考古学の分野でも、このハヴァフィールドの「ローマ化」概念が用いられた。

ところが、1990 年代からイギリスの考古学者たちがハヴァフィールドの研究を批判し始め、「ローマ化」はイギリスのインド植民地支配を背景として生み出された帝国主義的言説であると論じたのである。ポスト・コロニアリズムの考えをとる考古学者たちは、先住民の立場に立ってローマ帝国の支配とそれを肯定する学説を批判し、「ローマ化」概念は先住者の文化や歴史を無視するものだと非難した。さらに、「ローマ化」に代わる「クレオール化」概念を提唱する試みもなされた。「ローマ化」批判を続ける学者たちは新たな概念と認識の枠組みの構築に努め、21 世紀に入ると近現代世界に用いられる「グローバル化」の概念を適用しようとする試みも現れ、2005 年には考古学者 R・ヒングリが『ローマ文化のグローバル化』を出版した。さらに議論は進み、2015 年になると「グローバル化」概念の有効性を問う共同研究の成果も刊行された。

一方、歴史学者には「ローマ化」批判を受け入れない者が多く、「グローバル化」概念の使用についても否定的である。ただ、歴史学者も実証研究のレヴェルでハヴァフィールドの見方を批判し、例えば、ローマ化が著しく進んだとされてきたイベリア半島バエティカ地方の発展の程度や質に疑問を呈している。ローマ化をめぐる問題は概念だけではないのである。また、ローマ化と切り離せない帝国の統合については歴史学者の間で研究が高まりを見せており、法、軍隊、さらにネットワークやコミュニケーションまで、考古学者たちの議論とは趣を異にする研究が深化している。本研究開始当初の背景は以上のようであった。

２．研究の目的

ローマ帝国は、広大な領土に中央集権的な統治を行い、安定と繁栄を実現したとされる。帝国領内には都市が発達してローマ風の生活様式が伝播し、住民は文化的生活を享受したと解されている。かかる事象や変化は「ローマ化」の概念で捉えられ、その達成は高く評価されてきた。しかし、20 世紀末、「ローマ化」は考古学者たちから帝国主義の影響を受けた概念と指摘・批判され、その進展の度合いにも疑問が出された。21 世紀に入ると、帝国社会の変化をめぐる議論は新たな展開を見せている。はたしてローマ帝国は支配地域やその周辺の社会や暮らしを変えたのだろうか。また、もし変えたとすれば、それはどのようなものだったのだろうか。この問いは、帝国が真に国家統合を達成したのか、という問いに直結する。

本研究は、「ローマ化」概念批判以降の考古学者たちの議論を正面から受けとめ検証した上で、歴史学者の帝国統合の議論に組み込んで考察することを目的とする。そして、ローマ帝国の統治と統治下の住民生活の実態を解明して、帝国支配の影響力と帝国の世界史的意義を深部で捉え直すことを試みる。

本研究の具体的な目標は、二つある。一つ目は、考古学者たちの議論と研究成果を整理・吟味し、歴史学者としてそれらをどう取り扱うかを考察することである。そして、「ローマ化」概念で説明されてきた事象の実態を現地調査も踏まえて解明し、考古学者の議論や研究成果と突き合わせて帝国の変化の如何を問うことである。二つ目は、この考古学者の研究とその検証結果をローマ帝国の国家統合に関する歴史学者の議論に組み入れ、ローマ帝国の世界史的意義を再考するところまで考察を進めることである。

３．研究の方法

本研究は、上記の研究の目的を達成するために、以下のような研究の方法を実践することとした。

（１）「ローマ化」概念論争に始まり「グローバル化」論をめぐる議論まで、ローマ考古学者が主導している研究と議論を詳細に検討し、その射程と問題点とを明らかにする。2003 年に刊行した拙著『海のかなたのローマ帝国』において、20 世紀の「ローマ化」をめぐる議論の粗い整理は済ませてあるので、ここで行うのは今世紀に入って以降の研究の歩みを検討することになる。

とくに、20 世紀末よりイギリス考古学者の旧説批判活動の中心にいるダラム大学 R・ヒングリ教授の見解、特にローマ世界への「グローバル化」概念適用に関しては、論著を検討するだけでなく対面で直接意見交換をおこない、同教授の見解を正確に把握するとともに、研究代表者独自の考察の観点を得ることができるように試みる。
（２）ローマ帝国の国家統合の問題について、2011 年の国際会議(その成果の論集は 2014 年に出版)以後の研究成果を検討し、現段階で検討すべき重要な個別テーマを確定することを試みる。
（３）考古学者たちの議論を整理した結果に基づいて、実際の遺跡・遺物の検証を進める。研究史上、ローマ帝国の行った改変が顕著に表れたとされる帝国領の西半、とくに現在のドイツ、フランスに相当するガリア諸属州に注目し、検証するに相応しい遺跡や出土資料所蔵地を選んで現地調査する。
（４）現地調査で得られた知見を帝国統合の研究に組み込んで検討する。とくに、ガリア諸属州における「ローマ風」の進展の度合いを見極めるだけでなく、ローマ化が推進された属州都市の機能と帝国政府との関係や、ローマ化が進展していない田園地帯と都市との関係を立ち入って検討する。また、住民の意識にも注目し、彼らが果たして「ローマ人」として暮らしたのか、そのアイデンティティについて可能な限り調査する。

４．研究成果

本研究は、新型コロナウイルス感染症の世界的流行によって、研究期間の途中から計画通りの実施ができなくなった。とくにヨーロッパでの現地調査が不可能になったため、研究期間を２度延期せざるを得なかった。コロナ禍が遠ざかってから研究体制を立て直し、当初の研究計画が目指していた作業を実施することができた。主な成果は以下のようである。
（１）　イギリスを中心とする考古学者たちの「ローマ化」概念批判とその後の研究活動を整理し、研究史上の基本的な問題点が、「ローマの文化」を単一で均質と見たり無前提に先住者の文化より優秀と考えたりするところや、「ローマ化」が「過程」なのか「結果」なのか不明確なところにあると指摘できた。さらに、文化の伝播と変化の捉え方に関する方法論や観点を吟味するとともに、「ローマ化」概念を用いる研究者の過程分析モデルを検討した。この研究成果は、「ローマ帝国による統合をめぐって」『西洋古代史研究』第 20 号（2020 年）で発表した。
（２）「グローバル化」概念の適用に関して、その主たる実践者である R・ヒングリ教授とダラム大学で会い、意見交換した。直接話を聞くことで教授の見解を深く理解することはできたものの、研究代表者には依然疑問が残り、この概念を使用することに賛成できないと判断した。また、「ローマ化」であれ「グローバル化」であれ、概念を創出した時代の影響を受けていることは間違いないゆえ、概念を安易に受け入れることなく、また歴史学者の多くのように「ローマ化」概念批判後の考古学者たちの議論を無視するのでもなく、ローマ帝国の国家統合という別次元でなされている研究に取り込みながら検討することが大事であると確認した。「グローバル化」をめぐる議論については「ローマ帝国とグローバル化」『西洋古代史研究』第 18 号（2018 年）で、ヒングリ教授訪問については「ローマ化とラテン語」『西洋古代史研究』第 19 号（2019 年）でそれぞれ報告した。
（３）「ローマ化」が進行し属州の変化が著しいとされたガリア諸属州について、考古学者たちの研究に加えて、現地における史資料の調査、博物館や遺跡での調査により、「ローマ風」の進展度を理解しようと試みた。直ちにデータ化することは難しいが、「ローマ風」よりも先住者のローマ征服前の生活様式の残存や文化の混淆状態が強く感じられ、同時に碑文史料などを根拠に、属州住民の所属意識などアイデンティティに関わる分析の推進が必要であることを痛感した。こうした調査の成果をローマ帝国の国家統合の問題に組み込んで、ガリア諸属州のローマ帝国支配システムへの吸収について検討した。今後重大な研究課題となるのは属州に暮らす住民の認識の有り様、アイデンティティの問題であると考えられる。以上の点について、2023 年 11 月 2 日の史学研究会大会における講演「ローマ帝国は「世界」を変えたか　―統合・ローマ化・平和―」で報告した。
（４）　本研究の進行の過程で研究代表者が得た知見と認識を、まず論文「ローマ帝国と西アジア―帝国ローマと西アジア大国家の躍動―」『岩波講座世界歴史 3』（岩波書店、2021 年）に、次いで単著『マルクス・アウレリウス』（岩波書店、2022 年）に反映させることができた。また、コロナ禍で対面の研究会等が困難であったので、Zoom を用いたオンラインの研究会「ローマ帝国史研究会」を組織して、2021 年 1 月 5 日、1 月 9 日、2022 年 1 月 9 日に開催し、『西洋古代史研究』第 20 号に発表した論文と『岩波講座世界歴史 3』に発表した論文について参加者に検討いただいた。同じくオンラインの研究会「京都大学西洋古代史懇話会」の 2022 年 10 月 29 日開催の会で「ローマ帝国による統合の問題」と題する報告を行い、研究の中間報告に参加者から多くの意見をいただいた。
（５）研究代表者は 2013 年の著書で、ローマ帝国は「ローマ人のアイデンティティ」の共有を通じて統合を実現したとの見方を示した。「ローマ人のアイデンティティ」とは、ローマ帝国最盛期に、イタリアのみならずローマ領とされた地域に広く見られる住民の現実生活と意識を抽出して設定したものであり、ローマ人たる「われわれ」と帝国外の「他者」との対比を軸の一つにしている。ただ、本研究を通じて、属州に生活する人々の意識のあり方をさらに立ちいって研究する必要があることが判明した。帝国支配による変化の多い帝国領西半地域を中心に、研究の拡充を図ろうと考えている。この帝国領西半と比較する観点から、帝国領東半のギリシアに生き

た著名な文人プルタルコスに関してエッセイを発表した（「『ローマ人』プルタルコス」『西洋古典叢書月報』150、京都大学学術出版会、2021 年）。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 南川高志	４．巻 150
２．論文標題 「ローマ人」プルタルコス	５．発行年 2021年
３．雑誌名 西洋古典叢書月報	６．最初と最後の頁 2-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 南川高志	４．巻 20
２．論文標題 ローマ帝国による統合をめぐって	５．発行年 2020年
３．雑誌名 西洋古代史研究	６．最初と最後の頁 53-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 南川高志	４．巻 19
２．論文標題 ローマ化とラテン語	５．発行年 2019年
３．雑誌名 西洋古代史研究	６．最初と最後の頁 69-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 南川高志	４．巻 18
２．論文標題 ローマ帝国とグローバル化	５．発行年 2018年
３．雑誌名 西洋古代史研究	６．最初と最後の頁 87-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 南川高志
2．発表標題 ローマ帝国は「世界」を変えたか　―統合・ローマ化・平和―
3．学会等名 2023年度史学研究会大会（招待講演）
4．発表年 2023年

1．発表者名 南川高志
2．発表標題 帝国は何を成したのか　―ローマ帝国の表象と歴史的意義をめぐって―
3．学会等名 第68回日本西洋史学会大会（招待講演）
4．発表年 2018年

〔図書〕　計2件

1．著者名 南川 高志	4．発行年 2022年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 220
3．書名 マルクス・アウレリウス　―『自省録』のローマ帝国	

1．著者名 南川高志　藤井崇　三津間康幸　池口守　春田晴郎　高橋亮介　田中創　南雲泰輔　大谷哲　井上文則　冨井眞　中川亜希　桑山由文　佐々木健	4．発行年 2021年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 292
3．書名 岩波講座世界歴史3　ローマ帝国と西アジア　前3世紀～7世紀	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関